

---

# 純愛 ~ありがとう~

葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純愛～ありがとう～

### 【Zコード】

N7447Z

### 【作者名】

葉月

### 【あらすじ】

突然お兄ちゃんができちゃったおんなのこのはなしです

## 家に美形がやつてきた

もし、突然兄ができるたらあなたはどうしますか…？  
しかもそれがあからさまにもうそうなイケメンだつたりしたら…！  
普通の女子中学生としてはどうしたらいいんですかあつ。

時は数時間前にさかのぼります。

いつも通り学校から帰つてドアをあけたお母さんと若い男の声…。

「ほんと、唯<sup>ゆい</sup>くんはかわいいわねえ」  
「いえ、そんな…ほんとありがとうござます。お母さん  
お母さんっつ…？なんで…？どうして…？どうしたの…？  
おやるおやるコピングにこくと カラカラの髪に切れ長の目  
やさしそうな笑顔のあたしの学校の高等部の制服をきた美少年がお  
りました

「おやつをおやせん…？」びりこりんよ、しれはー。  
「あらあ、おかえり、愛莉。今日からつかの息子になつた、唯く  
んよ」  
!!

## 美形の事情（前書き）

なんかありがちな感じですみません…

## 美形の事情

「はじめまして愛莉ちゃん。今日から山本家にお世話になる山本唯です」

「は…はじめまして。山本愛莉、城門学園中等部2年1組41番ですっ」

「愛莉、お父さんの親友の息子さんよ。この間の地震で観光に行つていたじ両親が…」

「お母さん、重い話は置いとこ…。オレ、この明日から城門高校の高等部に転校するんだ。よひじく なんで、愛莉ちゃんが泣くんだ…」

「『めんなれ』…明日からよひじくお願いします」

逃げちゃつた…自分の部屋に…だつて、悲しそうな『ノンノン』

ノックと同時に唯さんが入ってきた

「愛莉ちゃん、オレはね、親父とお袋が死んでもく悲しかったよ。でも、一人は一緒に死ねたんだ。せめてバラバラじゃなくてよかつたと思つてる…だから、泣かないで」

「…はい」

「それで、オレ高等部1年1組なんだけど担任つてどいつひとつ?

「松本先生…40歳くらいの男の先生で、社会の先生。太つてるけど、話はおもしろいです」

「そうかー。結婚してる?」

「してない、うえにはげてます」

「アラフォーで未婚で太つてて、はげ?残念な感じだなー」

「アハハ、そうですねー。松本先生はおもしろいんですけど、学年主任の一階堂先生はこわいです。」

「もしかして、数学?」

「国語です」

「残念、はずれたか。じゃあ、夕食を食べに行こう。今日はカレーだつて」

唯さんが出ていくと部屋が少し暗くなつた感じがする。明日、あんなかつこいい人が転校してきたり話題になるだろ?」な

## 尊の美形の鱗丸（複数形）

「んばんはー、いまサブタイトルの付け方になやんでいます。なので  
サブタイトルがめちゃくちゃです…」

## 噂の美形の騒ぎ

「愛莉ーーー！今日一緒に登校してきた人だれよ？すごいかつこよかつたよねーーー？」

「アーニー、立つてた」

朝、教室に入ると案の定にクラスの子に質問攻めにされた。

「お兄ちゃん。あの「ひでわたの」

11

さらりと爆弾発言をしてみた。  
みんな一瞬固まつたけど次の瞬間

「えー？ なにそれ！？」

「いいなーかっこいい

卷之三

えーと…そりそり兼ねて懸か?ホーメル前に学校案内す

タイミング良くドアが開いて

「愛莉ちゃん！！」

「唯さん。クラスの子たちが  
つて、え!?」

やつぱ、唯ひとひすまうじこなー。

「身長何センチですか？」

「体重は？スリーサイズも！？」

「写真撮つていいいですか？」

なんか、すゞい騒ぎに……案内はできないかな……

『キンコーンカーンコーン』

予鈴だ。

「どうねばで、愛莉ちゃんせいかく約束したの?」  
「うめん。また

ね  
！

懐かん世風のよひに振りていれました。



## 試験

一学期中間試験もまつた。中の今日この頃……なんで試験とかあるんだろ……なくていいよね?なくなればいいのに!」

試験勉強に追われて頭が壊れ気味です……とはいえ、試験も明日で終わり!おわる!…やっと!…!

私も誰さんもさうと部屋で勉強しているのでお母さんごめんなさいです。

『ノンノン』

「愛莉ちゃん、いる?」

唯さん?

「はーい、ビーベー」

「夜遅く」「めんね?シャー蕊あまつてない?」

「ありますよー、はー。明日は自由ですね」

「そうだね。でも、」「お泊りのお店じりなんだよね…」

「案内しますよ」

「ホント?ありがとうございます。今度よろしく。」

試験終わりました!!英語がホント難しくて!過去形とか、現在進行形とか、わけわかんない。

学校から家に帰つてドアを開けるとお母さんと誰さんの話声デジヤウ

「と、こうわけで、わたし今から3泊4日で北海道旅行に行つてくるから、家と愛莉よろしくね。学校も試験休みだし大丈夫でしょう」

「わかりました。行ってらっしゃい」

「お母さん!?!」「きなりビーブしたの?」

「友達に誘われてねー。じゃ、行つてくれるね」

ハハ去つていきました。

「愛莉ちゃん、お店案内してくれるつていつたよね。いまでもいい?」「

「いいですよー。駅前でも行きますか?」

「うん、ありがとう。洋服がなくて困つてねー。つていうか、そろそろお兄ちゃんつて呼んでほしーな」

ハイ?

「どうじでですか?」

「家族がほしいんだ…」

あ…そつか…じゃあ

「一緒に買い物いこひ、唯お兄ちゃん。夕食も買わないとね」

やつひこひと唯さんはうれしそうに笑った

## お買いもの

「唯さん、何買つんですか？」

「あれ? 唯さん、に戻っちゃうのか。」

「外では。だって、似てないから、わけありますって言いふらしているようなものですよ?」

「そつか。愛莉ちゃん、ちょっとこのお店入つていい?」

いいながら唯さんは、メンズのお店に入つて、Tシャツとパーク

ーとジーンズを即買いした

「試着もせずに買つていいんですか?」

「うん。愛莉ちゃん、ガソリンスタンンドとファーストフード店とカラオケどこが好き?」

「…カラオケ?」

「じゃあ、バイトはカラオケにしようかな。」

「バイト、するんですか? つていうかそんな簡単に決めちゃっていいんですか?」

「決断は早いほうなんだよね。考えたつて変わらないし。後で面接受けにくから夕飯任せでいい?なんか買つてね」

「いいですよ。もう買つものないなら今から言つてきても。」

「ありがとう。お礼になんか買つてね」

千円札を一枚を残して唯さんは去つて行きました

4時間後 19時

「ただいまー、遅くなつてごめんね。…ごめん、疲れっちゃつて夕食たべれそうにないから冷蔵庫入れといてくれる?」

唯さんふらついてるんですけど、だいじょうぶかな?

「それはいいんですけど、だいじょうぶですか?」

「つ  
て、  
え  
…熱  
！？」

過去（前書き）

唯  
視  
点  
で  
す

## 過去

立ち上がる……だるい……

「……ごめん、愛莉ちゃん……ちょっと部屋行くね……」

言い残して、部屋に入つてベットにたおれこむ

眠い

親父？お袋？どこいくの？ダメだよ……そつちは地震が！  
ねえお願ひこつちに来て！！

こつちだよ！！！

「……ん…夢か」

「お兄ちゃん…おはよう。大丈夫？うなされてた。もう朝十一時  
だよ」

「愛莉ちゃん！？」「ホフ…」

額に愛莉ちゃんの指が当たる。冷たい

「熱…高いね…体温計とスポーツドリンク持つてきておいたから  
「ありがとう…いつから部屋にいたの？」「つづちやうでしょ」

「大丈夫。おかゆ食べれる？」

「「じめん…お腹すいてなくて…」

「うん。ゆっくり休んでね」

そういつて愛莉ちゃんは部屋を出て行つた

大きくなつたな…愛莉ちゃんは覚えてないけど幼いころに何回か  
会つてゐる。オレが5歳の時に引っ越しして以来会つてなかつたから驚  
いた。オレの記憶の中では愛莉ちゃんは3歳のままだつたから…  
可愛かつたよ？子犬っぽくて。そういうのはいまもあんま変わ  
つてないけど。

「「ホ…」「ホッ ホ… 頭痛い…」

まづいかも。なんか熱上がってる感じするし…… 39・4度?  
知らないほうが良かつた気がする… 傷とかも見ると痛くなるじやん!

…メール?

『お兄ちゃん、私たちと友達と遊んでくるね…お大事に。お鍋にお粥があります。よかつたら食べてね』愛莉

外行つてくれるのは助かる…移したくないから

広い部屋…高校生のしかも、養子の部屋で10畳は広すぎるよね  
?高校も行かせもらつてるし…バイトして返したかったんだけど

…情けないな。

お腹すいた。お鍋にお粥?

「うわっ……クラクラする…」

立つた瞬間めまいを感じて座りこむ…お粥はあきらめるか

「はあー、ホント情けない」

唯さんの風邪もすっかり良くなつて、衣替えの季節です……

制服も、冬服から夏服に代わつて、なんか新鮮です。冬の黒…紺  
？色のセーラーから白いセーラー服になつて気分も明るくなる…

「愛莉ー、宿題やつた？」

「国語と数学はやつたよ？」

試験休みは短いくせに宿題はたくさん出るんだよね

「つまり、英語はやってないんだよね？ 英語見せてあげるから數  
学うつさせて！」

「交渉成立」

ハイタッチ。親友の麻里とは苦手科目が違つから便利。

「今日、なに返されるかな？」

試験の後の授業はほとんどがテスト返し。

「英語と、数学代数、数学幾何、国？、理科？、世界史かな？あ、  
先生きた」

担任の田中先生は優しすぎてみんな話を聞かずにしゃべつてる。

…体育祭とか聞こえたような…一週間後！？

うちの学校の体育祭は、中1から高2まで縦割りに5チーム…唯  
さんと同じチームじゃん！！

「愛莉ー、うちら実行委員だったよね？」

斜め前の席の麻里が小声でいつている…そうでした…忘れてたけ  
ど、4月10日そななものになつてました

「…そうだね」

「楽しみー」

「何が？」

「だつて、ほら、みて？」のプリント

麻里と話してゐ間にプリントが配られたみたい…実行委員のみん  
なへ、昼休み203教室に来てください。実行委員長有川 直樹、

副委員長林 未来・山本 唯…！？

「愛莉のお兄ちゃんと初対面！」

「…転校してきて1ヶ月の人ができるの…！？」

「できるんじゃない？一人いるし」

「？」

「愛莉ー遅れちゃうよ。早くこいー」

「まだ早いでしょ」

麻里は実行委員会が始まるまで後15分もあるのにそんなこと言つてゐ

「唯さん、見てみたいんだもん」

「だもんつてアナタ何歳？」

無理やり弓張られる

木方・大丸 異文

203教室、まだ早いのにもう何人かいる

一 唯さん！

あれ、愛莉ちゃんも実行委員たったの？」

「嘘やん」「なんで嘘撒く奴とかや! てなんですか?」

「……今朝誰かせるか語し合ひて、押しつけられた」

「……………」  
唯二!!!俺たちにお前が適任だと思ふたんだ(

笑  
一

遠くから声が飛んできた

「それ押しつけていたんだ!?」

「アノアノアノ  
あ、  
はじめまして  
愛菜の友達の小池麻里です」

はじめまして  
元の唯です ようじく

お心にござりますまい。

かくかくノガ集ニテ、きが付ニシテ、人々是々ニシテ、

生で50人がからおかだ! まがな

いわゆる空はしめるから

前回に述べたとおり、個人的には論じぬ力

第一回体育祭実行委員会をはじめます。高等部1年1組山本唯

です。委員長がいないので同念やりさせてもらいます。楽しく安全な体育祭にしたいです。では、高等部一年生から順に自己紹介お願ひします

「委員長、たほりかな?」うちの学校の行事は、基本高3は受験があるから雑用はしないんだよね。

「次は中2お願いします」

唯さんによく通る声

「1組小池麻里です。よろしくお願いします」

「同じく山本愛莉です。よろしくお願いします」

びっくりした…

「次に放送、用具、得点、会場などの係を決めます」

「なんか、唯先輩、そつないよね」

麻里が小声で言つてくる

「そうだねー、慣れてんのかな?」

「あんだけ目立つてれば慣れててもいそうだけじね」

確かに、あんまりじっくり見たことないけど、少し長めの栗色の髪はさらさらで、ちょっと細いけど背は高いし顔も整い過ぎてくらいい整つてる…

「愛莉ー? いくらかっこいいからってガン見しちゃ。私たゞ得点係の午前中の後半に決めちゃうよ」

「えつ? あ…うん、任せる」

## 体育祭ー 3（前書き）

学校の課題、やっと終わりました！！  
といつて、すこしづしづに書いてみました

## 体育祭ー 3

体育祭当日です。

…事件は起きました。得点版が消えたのです。

ちなみに責任者は私、山本愛莉です…あれつ？あの白い板は…？見つかった…！！よかつた…！！

でもなんであんなところに？

場所は屋上、プールに浮いています

…やっぱり、届かない。すぐ届きそうで届かない…あとちょっと

と…

「愛莉ちゃん！」

「え？」

バシャーン…………

「…………」

落ちたのは唯さんです。プール開きした後だから水はきれいとは  
いえ、相当冷たいはず…

「うわーーー！すごい！水もしたたるイイ男？」

麻里…いつの間に…。何で、カメラとか持つてゐる…？

「愛莉ちゃん、大丈夫だつた？はい、得点版。ちょっと着替えて  
くるから。」

「はい。ありがとうございます」

「ねえ、愛莉…これやつたの、中3の子だよ？気をつけたね。でも、うちその写真とつてたりしてるんだけど。どう使つ…？」

麻里…顔が怖い…

「とりあえず、様子見で」

「そう…愛莉は優しいねー」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7447z/>

---

純愛～ありがとう～

2012年1月10日23時50分発行